

講義レポート

国外調査 アーバン・グリーン

レポート作成：草加市 成田圭子

アーバン・グリーンは、ポートランド市があるマルトモナカウンティの隣の、クラカマスカウンティにあるオークグローブを拠点とする小さな市民グループです。ライトレール（MAX）の駅を新しく設置することが決まり、その際にこの地域に多く生えている樹齢30年の樫の木が伐採されてしまうのに反対して立ち上がったのがこの市民グループの契機です。

チップス氏はもともとオークウッドに居住していたわけではありませんが、この新駅開発にあたり、オークウッドの樫の木を守りたいという住民1人の想いに共感して活動を始めました。

ライトレール（MAX）の新駅の開発は、2008年にクラカマスカウンティのコミッショナーがオークグローブまで走行させると決定されていました。当初の計画では、新駅開発に掛かる総予算20億ドルの内、2千5百万ドルをクラカマスカウンティが負担するという内容でしたが、クラカマスカウンティの一部の団体から、カウンティがライトレールのためにお金を負担するのは不合理だという反対意見が出ました。そこで、カウンティがお金を負担することが意味あることとするために、ライトレールの事業主体であるトライメットは、アーバン・グリーンに対して、新駅の周辺住民の支援を取り付けるための協力を依頼しました。アーバン・グリーンとしては、ライトレールの新駅が開発されて交通の便が良くなることには賛成でしたが、昔から森林地帯であったこのオークグローブにコンクリートの塊のような駅はいらないと考えていました。そこで、新駅が開発されても、緑豊かな環境を作れるのなら協力すると回答しました。

アーバン・グリーンがまず始めたことは、地域の住民を集めることでした。もともとの地域にはネイバーフッドのような集まりはありませんでした。そこでまず、シャレットという小さな集会を始めました。シャレットには、新駅が出来て影響を受けるだろう全ての人を招待しました。少し離れた所に済んでいる人々にも、それぞれ家をノックして声をかけて回りました。友人にも声をかけ、そして知っている人を連れてくるように伝えました。自分の友人には、「何かしたいことがあるのなら来るべきだ」と声をかけました。また、活動が止まっていたCPO（地域計画組織）にも声をかけたり、汚水処理団体など思いつく団体全てに声をかけました。集会の参加者へは、「新駅が出来ることは決まっています。ここで何もしなければ、一番簡単で一番安い方法で駅や駐車場、車両の収納庫などが作られてしまいます。行政に自分たちの意見

を聞いてもらう約束は出来ています。あなたは何を望みますか？あなたとあなたの子どものためにこの地域をどう開発したいですか」と問いかけていった。すると予想外のアイデアが飛び出してきた。また今までこのような集會に顔を出さないような人も加わって話し合いはとても活発なものになっていきました。

そうして出てきたたくさんのアイデアを持って、トライメットとメトロ（広域行政組織）に交渉を始めました。「このアイデアをどうやったら実現できますか？」と投げかけました。メトロからはアイデアをまとめて、メトロの助成金プログラムであるネイチャーインネイバーフッドに応募してみても助言を受けました。そこで、7ヶ月間で助成金申請のための計画書を作成し、見事、助成決定を受けることが出来ました。

さて、助成金がもらえることになりましたが、アーバン・グリーンはとても小さな組織なので、どうしたら有効に助成金を使えるのかということを考えました。そこで、トライメットをパートナーの中に取り込むことを考えました。トライメットがこのプロジェクトのパートナーの一員になれば、彼らも私たちが考えていることをやらざるを得ないと考えたからでした。助成プログラムは、メトロから35万ドルが助成されるものでした。アーバン・グリーン側は計画実行のために、60万ドルの資金集めが必要でしたが、それはトライメットが用意することになりました。アーバン・グリーンはお金ではないことをすることにしました。トライメットに対し、地域のメンバーは、「この地域は元々森林で自然豊かな土地でした。ですが、今はアスファルトで覆われています。そこで、ここに駅と駐車場を作る時には、木を植えるとは考えずに、ここを森林だと仮定して、その地域の中にどうやって森林を破壊しない形で駅を作るにはどうすれば良いかを考えてほしい」と言いました。皆さんにも覚えていただきたいのですが、3年後には、新駅とその周りはアスファルトが取り払われます。この駅周辺が檜の木の新緑になるのです。針葉樹ではなく、照葉樹のまちにするのです。自分でもびっくりしていますが、森が出来ると信じられるようになってきました。これらは、最初の数人が大勢の人を巻き込んできたことで実現したと思います。

森が再生するだけでなく、ここに立つ駅も駐車場も美しいものになります。新しい駅はエネルギー的にも画期的なものになります。駅の天井にはソーラーパネルを設置し、雨水が循環し、電気自動車の充電場所も作ります。自転車の駐輪場の上にはグリーンルーフを設け、駅の展望台からはここ一帯の森を見渡すことが出来ます。そうして全米で一番緑豊かな美しい駅が出来るのです。新駅はライトレールの終着駅になる予定ですが、私たちはそうではなく、ポートランドに向けての始発駅だと考えています。この駅に降り立った人は、駅を降りると森に足を踏み入れるようなことになるでしょう。また、森の駅では様々なミーティングや音楽の演奏会や美術展も行われることでしょう。そしてそこには本当に大きな檜の木が立っているのです。駅の両側には

自転車専用道路を作り、この人が自転車でポートランドへ行くことも出来れば、ポートランドから自転車に乗って森の駅に来ることも出来ます。これらたくさんのアイデアは、住民から出たものです。中には、今までこのような集会には参加してこなかった人からのものもあります。日頃、参加しない人も参加者となる事が出来るのです。

駅が出来て森が再生したとき、生えてくるであろう植物や、集まる昆虫など生き物の写真を用意しました。ここに新駅の完成予想図もあります。メトロから助成金をもらったときに、「この助成金プログラムによって開発が行われますが、これが地域全体のまちづくりの始まりになる触媒となるものにしたい」と言われました。実際、このプロジェクトを契機に、この地域にネイバーフッドが誕生し、動き始めています。

ここまでの流れが上手くいったポイントと考えていることは、地域の人たちが集まって、集会の中で色々なアイデアを出してもらったことです。どんなアイデアでもつまらないものやおかしいものは何一つないというスタンスでアイデアを出してもらいました。また、そのアイデアを伝えるために、トライメットが行う駅のデザイン等のミーティングには、アーバン・グリーンのメンバーが必ず参加して、プロジェクト全体が違う方向にそれないようにコントロールしていったことです。

質疑応答

Q1 どうやって新駅開発派の合意を取り付けたのですか？

A1 誰がこのプロジェクトのステークホルダーなのかをしっかりと理解した上で、誰を集会に呼ぶべきなのか、誰を取り込むべきなのかを十分に検討しました。この地域にはネイバーフッドはなかったのが、アーバン・グリーンが音頭を取った形です。ネイバーフッドを作る協力から初めました。最初の一年は隔週で集会をしていましたが、住民達が自分たちの声を聞いてもらっているという実感を持つようになってきて、毎週集会を行うようになりました。

Q2 チップスさんのように絵に浮かぶように説明できる人はトライメットの中にいますか？また、最初、トライメット側は、アーバン・グリーンの計画に興味を示しましたか？

A2 最初、彼らは興味は示しましたが、従来のやり方、聞き方でした。しかしミーティングを重ねるうちに、そのような従来のやり方では私たちは関心を持たないと気がついて、少しずつ変わっていき、私たちの言うことを良く聞くようになりました。もし4年前にいきなり今の計画をトライメットに持ち込んでいたら相手にされなかったと思います。3、4年かけてトライメットも考え方が変わってきたと思います。今、トライメットの職員の中にも、このプロジェクトに誇りを持っている人がいます。で

すが、その過程は大変でした。トライメットの会議には参加するなど、積極的に関わるようにしてきました。このプロジェクトが実現したのは、アーバン・グリーンが素晴らしいからではなく、メトロの助成金がもらえたことが大きいです。助成金がなければこのような画期的なデザインを推すことは出来なかったと思います。この完成予想図をデザインした建築会社は、全米に名の通った大企業ですが、このプロジェクトは企業がやりたくでも出来なかったようなアイデアが詰まったプロジェクトだと言っていました。彼らは私たちのアイデアを形にしていっただけですが、今は自分たちが作ったプランのように話しています。私たちとしてはそれも良いと思っています。

Q なぜアーバン・グリーンのような小さな団体に依頼が来たのですか？

A そもそも、アーバン・グリーンは別のプロジェクトでメトロと2年ぐらい別のプロジェクトで良い関係を持っていました。クラカマスカウンティではあまりメトロは好かれていませんでした。メトロ＝ポートランドのように考える人が多くいました。別のプロジェクトは上手くいったことで結局メトロとは良い関係を持つことが出来たのですが、それを契機に、新駅開発に頭を悩ませていたトライメットがメトロに相談して、メトロがアーバン・グリーンを紹介したのです。今ではメトロもアーバン・グリーンも良い信頼関係にあると思います。

Q3 なぜ、ライトレールの開発を自分の家のことのように一生懸命に取り組んだのですか？

A3 ライトレールが来る事自体は嬉しかったです。アーバン・グリーンはあくまでも地元でフォーカスした団体なので、国政には関心がありません。なぜ、地元でフォーカスするのかと言えば、これからますます自分たちの地域が重要で、自分たちでまちを住みやすいものにするのが今後大事になってくると思います。公共交通機関が来ることは、この地元には必要だと思いました。私たちが行動をしなければ、ライトレールはこなかったのかもしれない。

Q4 なぜ、チップスはアーバン・グリーンのリーダーになったのですか？

A4 それは私が効果をあげることが出来る人だからではないかと思っています。これまでの経験が生きています。どのようなことに力を注いだらいいのか、どんなことに力を注がなくてもいいのか、誰を組めばいいのかなど、やり方を学んできました。アーバン・グリーンのメンバーは、皆経験を積んでいて、小さいながらも効果を発揮出来る人です。小さいながらのグループでは信頼関係もあって、いろいろな障害を乗り越えながら、皆、楽しみながら変化をもたらすための計画に力を入れてきました。話していて可能性を信じて実現にこぎ着けることは、とても楽しいです。

Q6 住民の合意を作る中で一番大変だったことは何ですか？またそれをどのように乗り越えたのですか？

A6 「やればできるかも。みんなの知恵を集めればなんとかなるという実感をもってもらうことが一番難しかったです。最初はみんなの家の中でそのような話から始めました。最初のハードルを越えて住民の意識が変わった後は、あとは個人個人のペースに合わせて進めることができるようになりました。2つ目の大きな課題はトライメットとのやり取りでした。トライメットと対話をした2年間で、トライメットとの関係性も変わってきました。トライメットの存在は助成金プログラムの一部になっているので、「これはコミットメントしているんですから、やらなければならないんですよ、トライメットとして住民に働きかけをしてください。」と伝えました。このプロジェクトに最初に集まった人々は大きなコミュニティの一員になって行きました。例えば、皆さんが来る前に新駅の完成予想図のパネルをイーゼルにたてていたら、「今から何をするの？」と近所の人々がすごく興味をもって声をかけてくれました。このまちは、昔からオレゴンに住む人々が多く、保守的、従来のやり方を変えたくない人々がいるところでしたが、今はトライメットやメトロからの印象では、おそらく行動を行う人、動く人たちがたくさんいるところというものになっていることでしょう。私がこの地域の人々に関心をかき立てたのがきっかけになっていると思います。何もしない人々から、色々していこうとする人々へと180度変わりました。この地域の人たちは新駅の完成をととても楽しみにしていて、「新駅をお祝いしよう」「草取りをしよう」と言ってくる人たちが多くいます。

Q7 反対した人はどのような理由からだったのですか？

A7 基本的に自分たちの住んでいる地域が変わってほしくないというのが反対の理由でした。少しでも変えたくないという人が非常に多かったです。また、公のお金を使うのは無駄使いだと思っていました。現時点ではそのような考え方の人たちは、クラカマスカウンティの半分近くを占めていると思います。日本でも同じように保守的な人が多いとは思いますが、クラカマスカウンティでも同じことだと思っています。この人たちはポートランドのような新しい考え方が入ってくるのを嫌がります。

Q8 小さな団体が大きなプロジェクトを行うのは大変だと思いますが、事務局機能をどうしたのですか？

A8 アーバン・グリーンは事務局機能を引き受けたくないで、トライメットを引き込みました。アーバン・グリーンは銀行口座を持っていないし、NPOなどの組織化もしていませんので、お金を受け取れる体制ではありませんでした。そこで、トライメ

ットが事務局機能を果たし、アーバン・グリーンは住民の合意形成を担うという役割分断をしました。

Q9 アーバン・グリーンのメンバーの想いがぶれないようにするにはどうしていますか？

A9 メンバーで会って美味しいものを食べてウイスキーを飲んで音楽をきいて楽しくパーティーをやっています。お互いの関係を楽しんでいます。「失うものは何にもなる。やってみよう」の精神でやっています。

Q10 アーバン・グリーンの今後は？

A10 アーバン・グリーンは特別な存在です。小さなグループのままでいいです。友だちの家のリビングに上がり込み、ふっと現れては、ふっと去るようなロビンフッドのような存在でありたいです。

A11 アーバン・グリーンは行政のまわしものか？とは言われませんでしたか？

Q11 確かにそういう人もいました。地域の中には新しい変化を起こそうとする私たちのことを「あ、アーバン・グリーンだ。嫌だな」と思うひともいると思います。目立ったことではなく、小さなことを確実に実現させながら、敵は作らずに普通の人々に話しかけていきたいと思っています。相手の反応はコントロールできないですから。

Q12 色々な意見をまとめていったポイントは？

A12 私たちは意見の選別はしないで、できるだけ多くの意見が出てくるように人の話をきくようにしました。多くの意見の中から良いアイデアが浮上し、その中で変わったアイデアは淘汰され、合意形成されていきます。投票によって意思決定をしたことはありません。意見を聞くといっても、受け身で聞くのではなく、このアイデアが良いなと思ったら一生懸命プッシュします。場合によっては私たちが物事を実行することになりました。例えば、アーバン・グリーンのメンバーは住民に信頼されているのでが行う駅の設計の会議には住民達は出て行かずに、アーバン・グリーンのメンバーが入ります。

Q14 集会内容等の周知方法等は？

A14 アーバン・グリーンとしては、ネイバーフッドに言ったり、CPO に行って話をしたり、私たちに経過報告をしてほしいというグループがあれば行って話をしました。トライメットには事務局としての情報公開義務があり、集会の翌日にはすぐにその内

容が公開されています。ここまで情報公開が徹底されているので、このプロジェクトが途中で頓挫することはありませんでした。

Q15 最初の始まりはチップスさんが1対1で地域の人に話しかけたのですか？

A15 一人一人に声をかけて「あなたが知っている人を連れてきてくれませんか？」と依頼し、それぞれの地域の状況を見ながら、誰に話すが、どういう話し方をするかを考えていきました。

以上